争いの時代 協調こそ解

生物地理学者ジャレド・ダイアモンド氏

コロナと世界（5）

2020/4/14 2:37 更新

ジャレド・ダイアモンド氏

――人類は過去に多くの危機に直面してきました。新型コロナウイルスの感染拡大をどう位置付けますか。

「14 世紀の黒死病（ペスト）では欧州の人口の約 3 分の 1 が死亡し、経済が回復するまでに 1 世紀の期間を要した。世界恐慌は回復までには 10～12 年かかったが、今回はより短いだろう。それでも誰もが認める危機であり、若い人はもっとも深刻と感じるはずだ」

「黒死病は影響が大きかったものの、感染が広がったのはユーラシア大陸だけだった。1918 年のスペイン風邪は致死率は 11%と新型コロナの 2%よりも高かったが、感染拡大のペースは緩やかだった。一方、（輸送）技術の発達が不利に働き、今回は 4 カ月ほどでパンデミック（世界的な大流行）となった」

――備えは十分だったといえますか。

「不十分だった。過去50年にわたりエイズや重症急性呼吸器症候群（SARS）、中東呼吸器症候群（MERS）といった新たな疾病と向き合ってきたにもかかわらず、米国政府は担当機関を解散してしまった。十分な数量のマスクを用意していたフィンランドのような例外はあるものの、多くの国は準備不足だ」

「SARSは野生動物が感染源となり、中国の動物市場から広がった。市場を閉鎖すべきだったが中国政府は見送り、同じパターンで新型コロナが拡大した。中国は伝統的な医療のために野生動物の利用を続けている。このままでは確実にパンデミックが再発する」

――歴史にどのような影響を及ぼしますか。

「新型コロナの封じ込めは世界各国が足並みをそろえないと困難だ。戦いに勝つには国際的な協力体制が要る。世界的な問題を解決するモデルになり、核や気候変動、水産資源の保護といった課題に国際社会が協調して取り組む契機になるのが最良のシナリオだ」

――楽観的すぎませんか。

「不足している人工呼吸器やマスクの購入で複数の国が争うなど悲観的になる理由はたくさんある。一方、ワクチンの開発などで世界中の科学者が連携し、米国と中国も多くの分野で手を携えるなど協力の兆候もある。世界的な問題が解決される可能性は51%と主張してきたが、新型コロナはもっと高いはずだ」

――中国が影響力を強める契機となるとの指摘もあります。

「状況は変わらない。中国は意思決定は早いものの、2000年以上続く独裁的な政治体制は誤った決断を下すリスクを内包している。市民は批判したり、選挙で意思を示したりできない。新型コロナも当初は存在を認めず、公の議論を禁止した」

――日本の現状をどうみますか。

「自国だけは例外と考えることが危機を乗り越える障害となる。米国に加えて日本もこうした傾向がある。都市封鎖や感染経路の追跡にそれほど前向きではないように感じるが、中国や米国と同様に感染者や死者が増えるリスクがある。重篤な症状に陥りやすい高齢者の割合が世界で最も高いことを考慮すべきだ」

（聞き手はシリコンバレー=奥平和行）

◇

Jared Diamond 1937年生まれ。米カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授。1万3000年に及ぶ人類史を描いた「銃・病原菌・鉄」でピューリツァー賞を受賞した。近著に「危機と人類」。